

オ 企業等との連携

(ア) 日本IBM株式会社との取組

北九州市は、地域のデジタル・トランスフォーメーション(DX)、グリーン・トランスフォーメーション(GX)の推進や、雇用の創出及び企業誘致活動の促進を図るため、令和4年8月4日に日本IBM株式会社と連携協定を締結した。

協定の項目には、「デジタル人材の育成」などが盛り込まれており、本校では令和5年5月19日及び10月13・14日に本校の生徒を対象としたワークショップを実施いただいた。

いずれも、テーマは「Tech for Good：市高がテクノロジーで北Qの未来を加速する」である。冒頭に「デザイン思考」の考え方をご教示いただいた上で、「ポイ捨てをなくすためにどうすればよいのか」をテーマに、IBMの社員が生徒たちの話し合い活動をファシリテートする形で進行した。教職員は、その様子を傍聴する形とし、教職員研修の一環にも資することにした。

「デザイン思考」は、実際に企業でも幅広く取り入れられている思考手法であり、ワークショップを通じて、生徒が新たな発想や考えを生み出すための体験的な学びを行った。

この取組では、「どんな意見も否定しない」ことをグラドルールとしていたため、心理的安全性が確保された環境下で、生徒たちの思考や発想が柔軟かつ豊かとなり、普段は発言が少ない生徒が積極的に対話に参加する姿もあった。

ファシリテーターが投げかける言葉によって生徒が発言しやすくなったり、自分の発言が認められたことに喜びの表情を見せたりしているのを目にして、教職員の中には、『上から目線』の大人の関わり方が原因で、日頃の学校生活において生徒が自分の考えを伝えにくくなってしまっているのではないかと振り返る者もいた。ワークショップの後、プログラムを参観した教職員が数名で振り返りを行っていたが、その際にも、大人(教職員)の生徒への関わり方を見直す必要があるとの話が出ており、大事な気づきの機会にもなったようである。



(イ) 福岡県中小企業家同友会との取組

令和5年度に、北九州市立大学基盤教育センターひびきの分室の石川敬之教授からのご紹介で、福岡県中小企業家同友会（以下「福岡同友会」という。）とつながることができた。

福岡同友会から、「山形同友会と山形大学が、香川同友会と香川県立三木高等学校等が先行して実施している『共育型インターンシップ』（香川県での呼称は『インタビューシップ』）の取組を、福岡同友会と市高とで一緒にやってみませんか」とお声かけいただいた。

「共育型インターンシップ」とは、学生（生徒）が地元企業を訪問し、経営者や従業員に企業の経営理念や事業内容、地元貢献の思いなどを聴き取り、学生（生徒）が進路選択について考えたり、働くことの意義について考えたりすることにつなげる取組である。また、企業の社員にとっては、学生（生徒）に説明する上で、会社の経営理念に係る振り返り、「自分はなぜ働いているのか」などと改めて考え直すなど、社員教育にもなっている。企業・学生（生徒）の双方に有益な取組であることから、「共育型インターンシップ」と呼ばれている。

令和5年7月31日から8月1日に、教育委員会と本校の教職員も福岡同友会の皆様に同行して、香川県での取組を視察させていただいた。三木高校での導入の経緯、生徒が企業訪問している様子、インタビューシップを体験した生徒の感想や変容などについて学ぶことができ、大変貴重な機会となった。

視察に参加した教職員から、キャリア教育の充実に生かすため、本校生徒の視野や職業観を広げるためにも是非やってみたいとの声上がり、本校の1年生17名を対象に冬休み期間中に導入することが決定した（生徒1名につき1社）。

導入前に、香川県立三木高校とのオンライン交流会を実施し、取組を実施する上で留意する点などについて教えてもらった。また、企業訪問に当たってのマナーや実習態度、お客様への接し方、服装、身だしなみ、インタビューする際の心得などについても事前に校内でしっかり身につけられるように心掛けた。

冬休み期間中に、生徒は一人で会社を訪問し、2～3日間を企業で過ごしながら、経営者や従業員の方々にヒアリングを行い、その内容をパワーポイント1枚にまとめた。

3月9日に発表会を開催し、参加した生徒と受け入れ企業が一堂に会し、生徒一人ひとりがそれぞれの取組を発表した。企業からは「自分たちの仕事の意味や価値を改めて考える機会になった」との声が寄せられ、また生徒からは「北九州市にこんなに熱い企業・会社があることがわかった。」「後輩たちにも是非経験してほしい。」などのコメントに加えて、働くことの意義、自分の親に対する感謝の気持ち、これからの進路などについて深く考えるきっかけにもなったようである。

令和6年度は、この取組を新1年生200名で実施する予定であり、既に福岡同友会との打合せなどを行っているところである。

このような、双方にとってメリットがある取組を積極的に取り組もうとする意欲が教職員間に生まれてきたことは大きな成果であり、さらに充実させて、生徒たちの輝かしい未来につなげていける学校にしていきたい。

※本校における「インタビューシップ」関連資料は参考資料5のとおり。

(4)「高校魅力化評価システム」から見えてきた変化

ア 生徒編

令和4年度に引き続き、令和5年度も「高校魅力化評価システム」を活用して調査を実施した。

本校で特に注視すべき項目と考えていた設問が、令和5年度調査ですべてプラスに転じたことは、教職員の多大な努力の結果であると一定の評価をしている。しかし、学年によって結果にばらつきが見られることや、急激に数値が上昇したことの理由や根拠が明確になっていない項目が多く、「このくらいの取組でよいのだ。もう十分である。」などと、数字だけを見て誤った解釈をしてしまったり、取組が停滞してしまったりすることも危惧される。

そのため、本校において、必要に応じて追跡調査を行うことや、今回の結果を踏まえて生徒や教職員がどのように感じるのかをワークショップ形式で行うことなども検討するべきではないかと考えている。

【「高校魅力化評価システム」の結果比較（生徒編）】

番号	質問項目	R4年度 生徒回答	R5年度 生徒回答
90	この学校を中学生にすすめることができる	56.5%	69.9%
66	この学校に入ってよかったと思う	70.2%	75.6%
20	失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある	64.8%	76.1%
22	人と違うことが尊重される雰囲気がある	68.3%	78.2%
17	本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある	75.9%	76.8%
29	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	44.4%	64.6%
39	現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	62.4%	64.8%
32	自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	42.2%	57.2%
61	地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	47.1%	62.2%
67	学習を通じて、自分がしたいことが増えている	67.8%	77.8%

イ 教職員編

本校では、令和5年度からの教育目標の一つとして「どの学校よりも圧倒的に多様な学びを提供すること」を掲げている。教職員の中には、今年度から、授業の中で「話し合う活動」や「協働して課題解決を行う活動」「専門的な知見のある外部人材を活用した活動」を行う頻度が昨年度までより大幅に増加した者もいる。

教職員へのアンケートについても、25項目中20項目で、令和4年度よりも高い、肯定的な回答を得ることができた。その20項目のうち、13項目では5ポイント以上高くなっているこ

ともわかった。

特に、「協働性」については全項目で肯定的な回答を得ているが、このうち、「人と違うこと、異なった意見を尊重している。」については、昨年度よりも25.3ポイントも高い結果となった。

【「高校魅力化評価システム」の結果比較（教職員編）】

	質問項目	R 4 年度 教職員回答	R 5 年度 教職員回答
主体性	失敗を恐れずに挑戦することができる。	58.3%	48.0%
	目標や当事者意識をもって挑戦することができる。	73.3%	60.0%
	自身の挑戦に、周囲を巻き込もうとしている。	40.0%	40.0%
	挑戦する人に対して、応援することができる。	73.3%	84.0%
	誰かが何かに挑戦しようと思ったとき、手を差し伸べている。	80.0%	84.0%
	子どもの自己決定を尊重できている。	63.3%	68.0%
協働性	人と違うこと、異なった意見を尊重している。	43.3%	68.0%
	ありのままの個人を尊重している。	56.7%	76.0%
	自分と異なる立場や役割を持つ人と交流している。	50.0%	76.0%
	立場や役割を超えて協働している。	63.3%	68.0%
探究性	本音を気兼ねなく発言できる。	26.7%	40.0%
	地域に、将来のことや実現したいことを話し合える人がいる。	30.0%	48.0%
	生徒に対してじっくりと話を聞き、考える手助けができている。	80.0%	76.0%
	お互いに問いかけあう機会がある。	46.7%	64.0%
社会性	自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会を持っている。	26.7%	60.0%
	生徒の関心に合わせて、機会を提供できている。	66.7%	64.0%
	地域の人や課題などにじかに触れる機会を持っている。	26.7%	44.0%
	地域で生徒を育てるという意識を持っている。	36.7%	52.0%
	この学校を中学生におすすめできる。	56.7%	60.0%
	この学校に関わってよかったと思う。	76.7%	80.0%
	この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる。	66.7%	80.0%
	授業の質の向上につながっている。	40.0%	68.0%
	自身の資質・向上につながっている。	36.7%	80.0%
	学習意欲が高まった生徒がいる。	46.7%	76.0%
	業務負担感の軽減につながっている。	0.0%	8.0%

※「高校魅力化評価システム」の結果については、参考資料6のとおり。

さらに、総合的な探究の時間に、北九州市立大学地域創生学群の大学生が学習支援に入ってもらい、大学生と意見交換・交流する機会を設けたり、他の高校（熊本市立必由館高等学校や広島市立美鈴が丘高等学校など）との交流の場面を意識的に作ったりするなど、新しい

試みにも着手するようになってきた。

今年度は、「まずは、学校外の人と交流してみよう！」からの漠然としたスタートであったが、結果的に様々な立場や考え方の人と交流する機会が充実して、順調に実施できた。生徒たちは、学校外の方々との交流を通じて既成概念に捉われすぎることなく思考を深める楽しさを味わうことができた。生徒たちの変容を目の当たりにした教職員たちは、その効果を実感することとなり、「日々の授業の展開方法をこれまで以上に工夫して、よりよいものにしていきたい。」など、積極的かつ主体的な発言が増えてきたように思う。

しかし、今はまだ学校全体としての取組とまでは言いづらい状況であるため、令和6年度以降も、教職員が生徒たちの変容から新しい発見につなげていく場面を意図的に設けたり、様々な教科において多様な人が関わり合い、交流したりする機会を増やしていきたい。

※北九州市立大学による「リーダーシップ研修」の資料等は、参考資料7のとおり。

(5) 学校の教育理念の柱をつくる

ア スクール・ミッション

◆スクールミッション「このような学校にします。」

市内唯一の「市立」高等学校の強みである北九州市のリソースを活用して、「産・官・学・民」と連携・協働しながら、絶えず変化する未来の社会や世界をけん引する若者を育成します。

本校は、北九州市唯一の高等学校であり、市役所や市内の企業等から声をかけていただきやすい土壌があり、産・官・学・民との連携がしやすい学校であることは本校の強みでもある。そのため、その良さをスクール・ミッション（令和5年3月30日策定）にも掲げ、教育活動の充実を図っている。

しかし、これまでの本校は「学校の中だけで何とかしなければ」といった内向きの意識が強すぎる側面があり、なかなか継続的な取組や活動の広がりまでには至らなかったのが実情である。さらに、コロナ禍がそれに拍車をかける形となり、外に開かれた活動自体が停滞・減少してしまっていた。

そのため、令和5年度については、「スクール・ミッションで掲げた目標が体感できる学校づくり」を目標に据えて、「外部に開かれた市高」への変革を目指すことにした。

その結果、日本IBM株式会社や西日本工業大学等による乗り入れ講話、北九州市立大学等と連携・協働した授業づくり、生徒が地域のイベントで市高の取組を発表する機会の設定など、これまで以上に多様な活動・実践につながり、生徒のみならず、教職員の視野やネットワークが広がっていった。「もっと〇〇したい。」「あの学校のように〇〇してみたい。」「より専門性の高い学びを生徒に提供したいが、どうしたらよいか。」など、ポジティブな「欲」が出てきたのは大きな変化である。

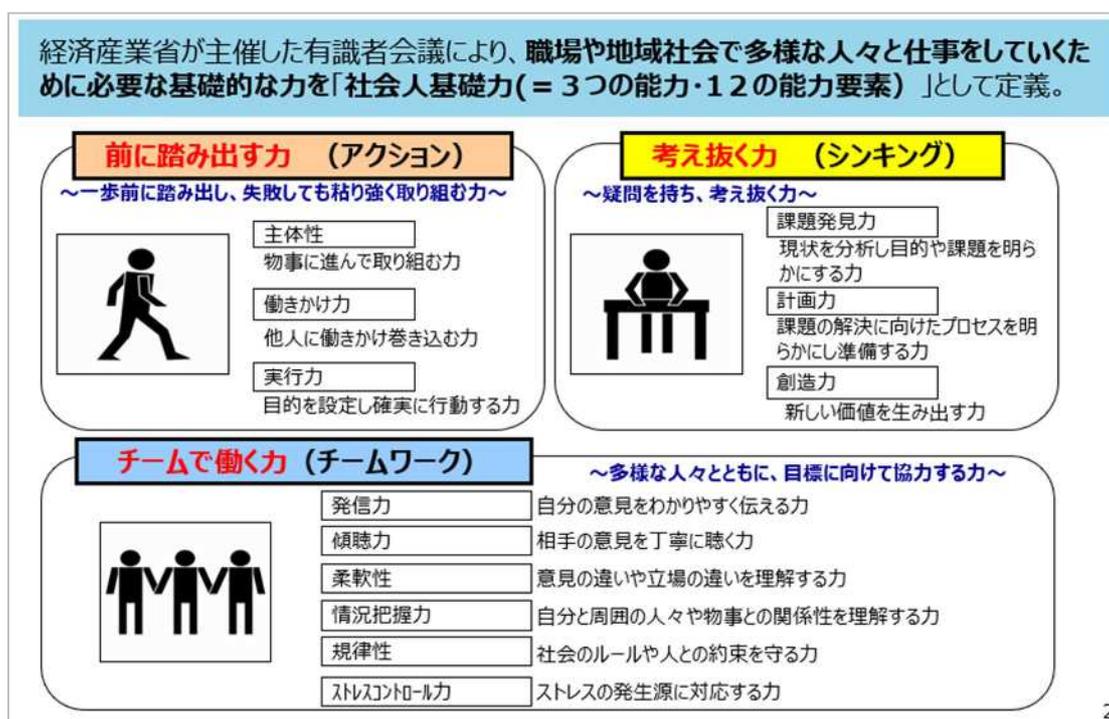
令和6年度以降は、これらの取組が総探や教育課程外の「市高タイム」の時間にとどまらず、教科横断的な学習にも生かせるようにしていきたい。

イ スクール・ポリシー

本校では、令和5年11月にスクール・ポリシーを策定した。

本校での学びを通じて、学習指導要領が目指す「生きる力」の3要素（①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力、③学びに向かう力、人間性）をバランスよく身につけられることを前提としている。

具体的な資質・能力については、経済産業省が平成18年に公表している「社会人基礎力」の概念図がわかりやすいので、それらも参考にしながら原案を作成した。



この学校がどんな教育を提供する学校なのか、この学校で学んだらどんな自分に出会うことができるのか、そのことを対外的に一番PRすることができるのは入学者選抜のときである。

実は、令和4年度の段階で、試験的にスクール・ポリシー（案）を作成して、令和5年度入学者選抜入試要項において示してみたが、特色化選抜や推薦入学者選抜などへの出願者の志願理由において、アドミッション・ポリシーに触れたものなどは全く見当たらなかった。つまり、市高の「魅力」が十分に浸透しきれていない、生徒や保護者にとってわかりやすい内容になっていないことが明確になった。

その反省に立ち、令和5年度に改めてスクール・ポリシーについて改めて学校内で協議し、さらにはコンソーシアムや運営指導委員会でも提示して、ご意見をいただきながら以下のとおり策定した。

◆**グラデュエーション・ポリシー（GP）「このような力を育成します。」**

＜未来共創科・情報ビジネス科共通＞

- 一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組むことができる力
- 疑問を持ち、考え抜くことができる力
- 多様な人々とともに、目標に向けて協力できる力
- 社会の変化にしなやかに対応できる力

＜未来共創科＞

- 課題解決に向けて、多様な人々を巻き込み実行力のあるチームを形成する力

＜情報ビジネス科＞

- ビジネスの視点で課題解決に取り組むことができる力

◆**カリキュラム・ポリシー（CP）「このような学びを展開します。」**

＜未来共創科・情報ビジネス科共通＞

- 産・官・学・民などの多様な人々と共に探究的な学びの充実を図ります。
- ICTを様々な場面で活用した学びの充実を図ります。
- 各教科・科目において、課題解決型の学びの充実を図ります。
- 社会の変化に対応し、活躍している人との交流を図ります。
- 地域の活性化に向けて、異学年・異学科でチームを構成し、チームで探究するプロジェクト型の実践的な学びの充実を図ります。

＜未来共創科＞

- 多様な人々と関わりながらチームを形成し、課題解決に協働して取り組む学びの充実を図ります。

＜情報ビジネス科＞

- 地域活性化に向けて、ビジネスの視点で捉え、チームで探究するプロジェクト型の実践的な学びの充実を図ります。

◆**アドミッション・ポリシー（AP）「このような生徒を受け入れます（求めます）。」**

＜未来共創科・情報ビジネス科共通＞

- 何事にも粘り強く取り組みたい生徒
- 現状に満足せず、向上したい生徒
- 他者と協力し、課題解決に取り組みたい生徒
- 探究的な学びに深く取り組みたい生徒

＜未来共創科＞

- 多様な人々を巻き込みチームを形成し、チームの一員として他者と協働し、課題解決に取り組みたい生徒

＜情報ビジネス科＞

- 商業教育をとおして、地域活性化に取り組みたい生徒

スクール・ポリシーを令和6年度の入学者選考要項の冒頭に掲載し、本校の教職員のみならず、入学志願者にも本校が目指す教育方針や方向性がわかるように工夫するとともに、入学志願者が「なぜ市高なのか」「なぜ自分は市高で学びたいのか」など、本校への志願動機を再確認できるようにした。

また、志願要件や内定基準の観点の中にもアドミッション・ポリシー（AP）を盛り込み、志願者が志願動機を再意識できるように工夫した。

【参考】赤枠は令和6年度北九州市立高等学校入学者選抜要項に示したAP

6	<p>次の全学科共通の要件及び学科別の要件をすべて満たす者であること。</p> <p><未来共創科・情報ビジネス科共通></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 何事にも粘り強く取り組みたい生徒 ○ 現状に満足せず、向上したい生徒 ○ 他者と協力し、課題解決に取り組みたい生徒 ○ 探究的な学びに深く取り組みたい生徒 <p><未来共創科></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 多様な人々を巻き込みチームを形成し、 チームの一員として他者と協働し、課題解決に取り組みたい生徒 <p><情報ビジネス科></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 商業教育をとおして、地域活性化に取り組みたい生徒
---	--

(4) 内定基準【特色化選抜】<未来共創科・情報ビジネス科共通>	
各選抜方法の内定基準は、以下のとおりとする。	
【コミュニケーション重視型選抜】	【評定重視型選抜】
出願時に提出する調査書における3年次の 評定合計が27以上の者で、次の 観点1 、 観点2 の評価が優れていると認められる者	出願時に提出する調査書における3年次の 評定合計が32以上の者で、次の 観点1 の 評価が十分であると認められる者
観点1	「他者の意見や他者から求められている事」及び「与えられた課題」に対して、自分の考えを表現することができる。
観点2	他者と協働し、主体的に課題解決に取り組むことができる。

その結果、令和6年度入学者選抜における特色化選抜や推薦入学者選抜の志願理由書の中に、アドミッション・ポリシーに関する文言が記載されるようになり、「こういう学びを期待するから市高に入学したい。」といった明確な意思が感じられるものが増え、偏差値ではなく、市高の「中身」に着目してくれていることがよくわかった。

一方で、それは本校での学びへの期待の声であり、教職員の姿勢・態度、授業内容など（現実）が、スクール・ポリシー（理想）と大きくかけ離れたものになっていないかを今一度よく確認し、常にスクール・ポリシーに立ち返って教育活動を展開していく必要がある。

そのため、学校行事等の企画や授業を実施する際などには、「これはスクール・ポリシーの何に該当するのか」「何を目指してこの取組をやっているのか」などを常に明確に結び付け、意識するように学校内でも周知徹底していきたい。

(6) 高校入試改革

ア インターネット出願方式の導入

これまで、入学願書を作成に当たり、下書きやボールペンで記入することに多くの時間をかけるなど、これまで志願者や保護者に大きな負担となっていた。そのため、DX

推進と志願生徒・保護者の負担軽減の観点から、インターネット出願方式に切り替えた。

導入初年度ではあったが、県内でも既に多くの私立高校が導入済みであり、保護者も慣れていることから、大きな混乱は発生しなかった。

保護者からは、「スマホからも手軽にできた。」「願書作成に当たり、これまでは中学校に出向いて担任と進路相談の上、願書の下書き、ボールペンで清書、入学選考料の支払いなどで、2時間はかかっていた。しかし、今回からは大きく時間短縮できて助かった。」など、今回の取組を評価する声が多数寄せられている。

しかし、中学校が調査書を本校に持参するなどの旧来からの事務が残っているので、これらについても改善できるよう検討したい。

イ コミュニケーション力を重視した選抜制度の検討・導入

本校の令和6年度入学者選抜では、3つの選抜方法で入学選考を行った。

- ① 特色化選抜
- ② 推薦入学者選抜
- ③ 一般入学者選抜

特色化選抜は、福岡県では平成31年度入試の際に初めて導入された制度で、「学校の特色にふさわしい生徒の入学をより一層促進する観点から、生徒の多様な個性を積極的に評価する」ことを重視した自己推薦型の選抜方法である。

上記①～③のいずれの選抜方法も、アドミッション・ポリシーに基づいて選考するものであるが、特に①特色化選抜については志願者の資質・能力が表出しやすい選抜方法となるように検討を重ねた。

【参考】令和6年度北九州市立高等学校入学者選抜要項から一部抜粋

6	<p>次の全学科共通の要件及び学科別の要件をすべて満たす者であること。</p> <p><未来共創科・情報ビジネス科共通></p> <p>○ 何事にも粘り強く取り組みたい生徒 ○ 現状に満足せず、向上したい生徒</p> <p>○ 他者と協力し、課題解決に取り組みたい生徒 ○ 探究的な学びに深く取り組みたい生徒</p> <p><未来共創科></p> <p>○ 多様な人々を巻き込みチームを形成し、 チームの一員として他者と協働し、課題解決に取り組みたい生徒</p> <p><情報ビジネス科></p> <p>○ 商業教育をとおして、地域活性化に取り組みたい生徒</p>
----------	---

【参考】令和6年度北九州市立高等学校入学者選抜要項（特色化選抜）から一部抜粋

特色化選抜（詳細は5～7ページを参照）

◆ 選抜方法について <未来共創科・情報ビジネス科共通>

次の2つの選抜方法より選択し、志願するものとする。

選抜方法	コミュニケーション重視型選抜	評定重視型選抜
内定者数の目安	未来共創科と情報ビジネス科合わせ「15名程度」を目安とする。 ※志願者数により変更することも考えられる。	未来共創科と情報ビジネス科合わせ「85名程度」を目安とする。 ※志願者数により変更することも考えられる。

◆ 内定基準について <未来共創科・情報ビジネス科共通>

選抜方法	コミュニケーション重視型選抜	評定重視型選抜
内定基準	出願時に提出する調査書における3年次の評定合計が27以上の者で、次の 観点1 、 観点2 の評価が優れていると認められる者	出願時に提出する調査書における3年次の評定合計が32以上の者で、次の 観点1 の評価が十分であると認められる者

観点1	「他者の意見や他者から求められている事」及び「与えられた課題」に対して、自分の考えを表現することができる。
観点2	他者と協働し、主体的に課題解決に取り組むことができる。

◆ 検査内容について <未来共創科・情報ビジネス科共通>

選抜方法	コミュニケーション重視型選抜	評定重視型選抜
検査内容	1グループ5名程度で次の①～③を実施 ①【グループワーク】 与えられた課題に対してグループで協働して取り組む ※課題解決の過程を重視して評価する ②【グループワークの振り返り】 実施した「グループワーク」を振り返る ③【グループ面接】 上記①や②に関わる質問に答える ※①～③を1時間程度で実施予定 (志願者数により変更することも考えられる)	1グループ5名程度で実施 【グループ面接】 志願理由等、本校のアドミッションポリシーに合致しているかを問う質問に答える ※1グループ15分程度で実施予定 (志願者数により変更することも考えられる)

選考方法の検討に当たっては、カリキュラム等CN（北九州市立大学地域創生学群の廣川准教授）にもアドバイスをいただきながら、大学入試での取組なども参考にして検討した。

実際に志願者役と評価者役で分かれ、志願者がどのように課題に取り組むようになるか、評価者がどのような場面を見て評価するかなど、ワークも重ねながら検討した。

初めて取り入れた選抜方法であったが、志願動機を自分の言葉に置き換えて説明したり、突如投げかけられた質問にも自分なりの解釈で臨機応変に対応する生徒が多数いたことが大変印象的であり、生徒たちから「絶対にこの学校で学びたい!」「市高でなければならぬ!」といった強い意思を感じ取ることができた。

ウ 志願倍率の変化

また、入学者選抜（特色化選抜）において、志願状況ベースでは、令和5年度の普通科では0.72倍であったが、令和6年度に再編する「未来共創科」の倍率は2.32倍であった。これも、教職員が広報の仕方や丁寧な説明に努めるなどの類まれなる努力の成果であると考えている。

寄せられた期待を裏切らないための授業改善に努めるとともに、引き続き産・官・学・民との連携・協働体制を密にして、社会からの要請に応じた教育課程を充実させていくことができるよう、教育委員会としても万全を期してまいりたい。

エ 合格内定者・合格者を集めた「ファーストコンタクト」を実施

2月17日（土）に九州工業大学内のGYMLABOで、特色化選抜入学内定者及び推薦入学者選抜入学内定者を集めたプレ入学体験会「ファーストコンタクト」を開催した。出身中学校が異なる中学3年生160名が一堂に会した一大行事であった。

これから学び合う仲間と出会い、この仲間と共に課題を解決したり、新たな学校文化を創ったりする気持ちを高め、わくわくした気持ちで入学の日を迎えられることを目指して開催した。

第1ミッション：アイスブレイク

シン・トモダチ補完計画「できるだけ多くのトモダチとハイタッチ自己紹介をせよ！」



第2 ミッション：チームビルディング

「逃げちゃ、ダメだ。共通点を発見し、チームを結成せよ！」



第3 ミッション：グループワーク

「マスダ作戦、開始。～もっとも高いペーパータワーをつくれ！～」



第4 ミッション：グループワーク

思考覚悟「自分たちのシン・イチリツをどうしたいか考えよ。」



軽食を食べながらのトークタイム



この取組は初めての試みであり、ゼロベースから計画・立案する必要があったことから、準備に関わった教職員にとっては少なからず負担を伴うものではあったが、実施前後の生徒の変容や寄せられた感想などを見て「取り組んでよかった」との声が上がっており、教職員にとっても学びや実りが多い取組になったようである。

自己紹介（アイスブレイク）やチームビルディング、自分たちの学校をどうしたいか（ワークショップ形式で実施）などの取組を通して、個性や考え方が違う者同士が出会い、互いに1つの目標に向けて取り組むよさを感じられる一日になったのではないかと考える。

この日は、初対面かつ数時間の取組であったため、本当の意味での「仲間」にはなっていない。また、開始直後はグループにあまり溶け込めない、または溶け込もうとしない生徒も見受けられたが、ワークが進むにつれ、徐々に溶け込むタイミングを見つけることができた生徒や、ほかの生徒にタイミングよく声をかけて輪に入りやすい雰囲気を作ってくれたグループなど、様々な変化が見られた。生徒同士が力を合わせて、試行錯誤しながら良好な関係を築こうとする様子が多く見られたのは大変心強かった。

大人（教職員）が、よかれと思って介入して「〇〇しよう」など声をかけると、生徒にとっては「大人からさせられた感・させられる感」が増すことになり、溶け込むことができない生徒にとっては自己肯定感の喪失やその場に居づらくなったりすることなどが考えられる。

今回の取組を通じて教職員間で再度認識したのは、学校で取り組むすべての活動において、「主役は生徒」であることと、教職員がやるべきことは生徒の一挙手一投足にいちいち口を出したり、手取り足取り教えたりすることではなくて、「生徒が主体的に行動する」ための支援、すなわち「コーチング力の向上」「『教える』『導く』からの脱却」であり、教職員たちにとって極めて有意義な行事であったとも感じている。

（7）令和6年度からのカリキュラム案

ア「カリキュラム検討委員会」

（ア）カリキュラムの試行実施・改善

校長、副校長、教頭、教職員3名から構成される「カリキュラム検討委員会」を校内に設けている。会議の際には、カリキュラム等CN及び大学生にも参加してもらい、令和6年度からのカリキュラムの検討を行った。

令和4年度に策定したカリキュラム案を出発点として、令和5年度は1年生を対象として試行の実施を重ね、随時、教育内容の質的向上を目指した改善を行った。

しかし、令和6年度から本格実施予定の学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」は、現行の1年生の教育課程には設定されていないため、「総合的な探究の時間」内での試行実施となった。「総合的な探究の時間」については、各学年1単位時間のみの設定となっているため、試行実施する内容は令和6年度に実施するカリキュラムの一部の実施に留まった。

令和4年度時点で、現行の1年生の教育課程に学校設定教科として組み込んでおくことも不可能ではなかったため、試行実施時間を十分に確保できなかったことについては猛省している。

しかし、一部のカリキュラムを一部の生徒に限定して試行実施する試みも併せて実施するなど、できる限り工夫しながら試行実施時間を確保し、改善に努めてきた。

(イ) 新たな学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」に係る単位数の再検討

令和4年度当初に検討していたカリキュラム案では、各学年を通じて1単位時間の割当てとすることを想定していた。

しかし、令和4年度末に実施した「北九州市立高等学校の魅力向上にかかるアンケート調査」の結果を踏まえ、充実した探究学習の実現、学びの質の向上及び生徒たちの能力開発に当たり、各学年1単位時間では足りないと判断し、各学年に2単位時間を配分することに決定した。

この単位数の再検討に当たっては、本校全体の教育課程に直結し、教科間の単位数の調整などが必要で、一筋縄ではいかなかったが、探究的な学びの充実という目標に向けて対話を繰り返し、思いを共有して、何とか推し進めることができた。

(ウ) 定期的なカリキュラム検討

カリキュラムの検討に際しては、時間割内に検討会議の時間を設けることで、定期的なカリキュラム検討に努めることができた。特に今年度は、令和6年度に向けて、新しく設定する学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」の試行実施をしていることから、事前打合せの時間としても活用した。

さらに、「イチリツ・プロジェクト」を試行実施している学年との打合せ時間も設定し、必要に応じて随時打合せを実施することができた。

(エ) コーディネーター（CN）及び外部有識者等との連携強化

カリキュラム検討に当たっては、校内での検討のほか、北九州市立大学 地域創生学群の准教授である廣川カリキュラム等CNや、コンソーシアムの構成員等とも協議し、学習内容の連携と深化に向けた検討を重ねることにより、生徒たちがより実践的なスキルを習得するための土台を整えることができたと考えている。

廣川CNの専門的知見（持続可能な地域づくり、地域資源管理論など）や、地域創生学群での学びのカリキュラム作りのご経験等を反映させることで、教育プログラムの質的向上につなげることができた。また、校内でのカリキュラム検討の状況・内容等について廣川CNに適宜ご相談することにより、カリキュラムの目標設定、学びを行う上で必要となる知識や技能などについてご助言いただくことができた。

また、カリキュラムの開発過程において、教育委員会、大学、コンソーシアム構成員、様々な企業とも積極的に意見交換することで、社会や時代からの要請に対応した教育内容となるように努めた。

1月30日に開催した第4回目のコンソーシアムでは、構成員に総探の時間に実施している「イチリツ・プロジェクト」の授業と、生徒たちが学ぶ様子も参観いただいた。より良い学びにつなげるための具体的な助言もいただくこともでき、カリキュラム内容の見直し・改善につながった。

(オ) 学生インターンと協働したカリキュラム検討

令和5年度から、北九州市立大学から長期インターンシップ生（1名）を受け入れている。学生インターンは同大学の地域創生学群の学生で、廣川CNのゼミ生でもあるため、ゼミで地域社会課題を解決するための学びを日常的に体験している強みがある。

そのため、新しいカリキュラムのプログラムに係るワークシートやプレゼンの作成の支援、探究的な学びを実践する生徒への支援（伴走）を担ってもらうことにした。

「顧客」である学生としての立場からの意見をもらうことで、本校教職員が地域課題の解決や探究的な学びづくりを実践する際に必要な視点・考え方、手順などを改めて考え、振り返ることができたとともに、また新たな気づき・発見などにもつながった。

(カ) 先進事例の視察とその活用

先進的・革新的な教育プログラムを導入している他校の視察も実施した。

これまでは、従来から培ってきた教育活動の経験に加えて、書籍やインターネットから得た情報、廣川CN等の外部有識者からの情報・助言などを基に、カリキュラム内容等を検討していた。しかし、それらはあくまで二次的な情報に過ぎず、実際に目にした情報ではないため、心もとなく感じることも少なくなった。

そのため、令和5年度は、実際に学びの様子を拝見したり、他校のカリキュラム検討の担当教員等との意見交換をしたりする機会を積極的に設定した。

視察を通じて得た知見は、教員間でも共有して、カリキュラム開発に当たっての新たな視点・考えの獲得にもつながった。

カリキュラム作りに関する情報だけではなく、生徒の探究的な学びの伴走の仕方、現在抱えている課題、その課題解決に向けた取組なども併せて知ることができた。視察校とのつながりもでき、その後の情報交換等も継続的に行うことができ、カリキュラム検討以上に得られたものも大きかった。

(キ) 探究的な学びづくりのための教職員の実践

カリキュラムの検討だけでなく、教員が探究的な学びを実践していく上で必要な支援の在り方や研究も必要と考えた。

そのため、現行の1年生で試行実施している「イチリツ・プロジェクト」の状況や、その授業に1年生の教員が実際に参加してみて感じたことなどを基に教職員研修を実施し、教員の伴走の在り方などについても意見交換して、「チョークアンドトーク」では対話型授業の大切さやファシリテーションのポイントなども踏まえて自分たちの授業の在り方を見直すきっかけとしてもらうことにした。

また、令和5年度から配置している探究学習支援CNである大庭CN（西南女学院大学非常勤講師）にも授業を見ていただき、授業改善に必要なポイントなどについてもご教示いただくことができた。

(ク) 客観的評価に基づくカリキュラム改善

令和4年度から「高校魅力化評価システム」を活用している。学校としてターゲットとするべき指標を見定めることや、学年ごと、個人ごとの状況や伸びなどを把握することにも役立っている。

この2年間で、「学習活動面」の充実については大きな伸びが確認できたが、それ以外の3項目「自己認識」「行動」「ウェルビーイング」については、10ポイント以上の伸びがほとんど確認できなかった。

つまり、「学習活動」の環境づくりは顕著な改善ができていると考えるが、その環境づくりや、実際に生徒の意識を変えたり、行動を変えたりするところまでは到達できていないということが明確となった。

そのため、令和6年度以降は、生徒が実際に動いて、学ぶ楽しさを実感できる学習活動づくりに重点を置き、本校全体の底上げにつなげていきたい。

また、令和5年度には、探究学習に係る資質・能力を数値化して評価するシステム「A i G r o w」を利用した。この評価については、自己評価に加え、3名の他者生徒からの評価も加えたものが数値化されるため、より客観的な評価が期待できる。

令和5年度は、試行実施として、年2回（1学期・3学期）のアンケートを実施

し、評価の伸び率を比較することにより、カリキュラム改善の視点を客観的に捉え、活用することとしている。

※カリキュラム検討会の様子



3 令和6年度の展望

＜学校設定教科 「イチリツ・プロジェクト」の学びの充実に向けて＞

令和6年度は、いよいよ新しい学校設定教科である地域課題の解決に向けた体験的な学び「イチリツ・プロジェクト」（以下「イチプロ」という。）がスタートする。

「イチプロ」では、「主体性」「多様性」「協働性」を育てることに軸を置いて取り組む予定であるが、一方通行で教員が生徒に教えるといった、座学中心の授業ではなく、様々な方々との対話を通じて発見した社会課題などを題材とした、生徒参加型の授業を実施していく。

外部人材を講師として活用したり、学校外でのフィールドワークを取り入れたり、大学と連携した授業の実施なども予定している。

学校・地域（地元）・北九州市の未来を「探究学習のテーマ」として設定し、異なる学校種（大学など）、市役所・区役所、市民・自治会・市民センター・商店街、企業・SDGsステーションなどと連携・対話しながら、社会課題などに対する改善策を協働して検討していくプログラムを実施する。

「イチプロ」のカリキュラム作成に係る作業自体は完了しているが、随時、生徒の学びの進捗状況に応じた修正・改善をPDCAサイクルで回していく予定である。

「イチプロ」には、北九州市立大学 地域創生学群の学生の皆さんにも学習支援（伴走）していただくとともに、隔週で実施予定の定例会にも参加いただき、教職員とともに振り返りを行い、意見をもらうことにしている。生徒の成長度合いを客観的に数値化できる評価手法の検討なども併せて実施していく。

「イチプロ」については、テーマや学習内容などを教職員やカリキュラム等CNなどの大人だけで作るのではなく、生徒の中から「学びの運営リーダー」や「地域課題解決に向けたプロジェクトリーダー」を選出して参加させるなど、生徒の意見も大切にしながら学習環境の改善やテーマ設定に生かしていきたい。

社会が変われば、必然的に学びも変わることになるので、学校内部での議論に満足するの

ではなく、コンソーシアムや運営指導委員会、学校運営協議会の議題としても取り上げて、様々な分野や立場からの意見をいただきながら、常に学びのアップデートを図っていく。

<高校魅力化システムについて>

定点観測（2学期に実施）を行い、経年比較していきたいと考えている。

また、令和5年度は実施できなかったが、カリキュラム等CNや授業支援に携わった大学生などにも教員用アンケートに回答していただき、様々な視点からの分析を行い、改善につなげたい。そのためには、評価結果を教職員研修などにも活用して、全員で考えて改善するための材料としたい。

生徒の探究的な学びに係る資質・能力の評価についても丁寧に分析を行い、原因と結果の関係性を視覚化して、「数字が上がってよかったね」だけで満足して、それで終わることがないように、一貫性のある取組に生かしていく。